クルマ社会の問題を考える

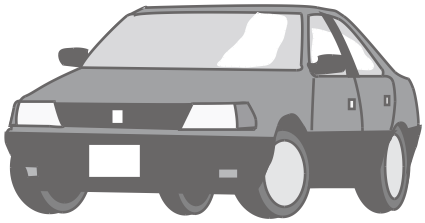
帯広市医師会
大正クリニック　　法　岡　健　一

開業を機に購入した車オデッセイで、自宅から約20km離れた郊外にあるクリニックまで往復して17年目、そろそろ17万kmとなり、還暦を迎える運転手ともどもガタが来始めています。普通のミニバンで、クラシックカーの愛好家でもありませんが、いつの間にか長く連れ添った相棒といった感じで、どちらかが動かなくなるまで乗ろうかどうしようかと迷っているこのごろです。安全運転を心掛けてはいるものの、オリンピック並に４年に１度くらいは危険な目に遭います。

幹線道路を走ることが多いのですが、たまたま信号で曲がって中の通りを運転していたら、急に目の前を横切る車！　急ブレーキを踏みましたが、相手の後部に接触し、相手は一回転して止まりました。バンパーの角に擦った跡がありましたが、お互い怪我は無し。一時停止の標識を見落として運転していた女性は、昔教えに行ったこともある看護学校の学生でした。以後、できるだけ国道から逸れないように注意しています。もっとも信号機があれば安全という訳でもありません。先日は自宅手前の中学校の交差点で車同士の事故があり、迂回して帰宅。その翌日も外出先の目の前の交差点で車同士の事故がありました。よく乗るタクシーの運転手さんに、事故に遭わない秘訣を聞いたことがありますが、青信号こそ注意が必要と言っていました。後日、青信号になって出始めたら、赤信号を突っ切ってきた車に出くわして、その意味を体感しました。

所沢での学生時代、野球で痛めた肩の鍼治療と兼バイトに自転車で通った道が、歩道のない狭いカーブで交通量が多く危険でした。最近は交通事故死者数が5,000人を切るようになりましたが、そのころは１万人を超えていました。重要な社会問題と思っていましたが、その後、結婚して子どもができると、その認識はさらに強まりました。やや道の狭い函館に勤務した1995年ごろ、新聞で帯広畜産大学の杉田聡氏が、『クルマ社会を問い直す会』を立ち上げたのを知り、その趣旨に賛同して入会しました。少しは社会活動にも参加しなければと思っていましたが、広報に使うシールのデザインに自分の案が採用されたくらいで、もっぱら会報を読むだけの会員です。開業して名刺にそのデザインを入れましたが、この会の名前を言うと、車を全否定していると勘違いされます。会の目指すものは、増えすぎたクルマを減らすこともありますが、公共交通を充実させ、排気ガスや騒音のない、安全に道が歩ける、子どもの遊ぶ道があるような人優先の社会を作ることです。例えば、オランダで始まったボンエルフという生活道路の概念に基づく、車の速度制限のためのハンプという凸部を道路に設置することや、歩車分離の信号機の設置等の提案をしています。学校周辺や通学路では特に必要ではないかと思われますので、PTAや町内会等に参加する機会のある方は、会のホームページ等を参考にしていただいて、話し合ってより良い街作りに加わってみたらいかがでしょうか。

高齢者による交通事故も大きな問題です。中でもブレーキとアクセルの踏み間違いは、右足でどちらも操作する車の構造的な欠陥と考えざるを得ません。乗っている車の２社にメールで問い合わせてみたら、安全技術の開発で対応するというものでした。補助する機能はあるようですが、保証するものではないとありますし、また今までの車に乗っている間は、どうしようもありません。ワンペダルという踏み間違い防止用のブレーキとアクセル一体型の器具を作っている九州の会社がありますが、それを取り付けるのもいいかもしれません。ただ、値段が20万円ほどするので広めるには助成が必要と思いますが、自動車メーカー優先の現政権下では、実現は難しいでしょう。

そこでほかに方法はないかと調べてみたら、左足ブレーキというのがありました。オートマチックの車ならブレーキが幅広くなっているので、アクセルは右足で、ブレーキは左足で操作可能というものです。たしかに今の車でもできそうですが、左下肢がやや斜めになり落ち着きません。もう少しブレーキを左に幅広く、または寄せた構造にすれば、十分使えるのではないかと思いました。レーシングカーでは、左右別足操作が主流だそうです。子どもも運転できるゴーカートもそうですね。メーカーにオプションとして作ってもらい、まずは還暦過ぎたら左足ブレーキで、というのはどんなものでしょう？

皆様、良いお年を。